シリーズ 元気です！ ㉕

しなやかに そしてたくましく

―ガールスカウト鳥取県第一団―

マンスリー・カフェは今日も満席

伏野のふれあいスポット「しらはま交流センター」で毎月一回、近くの施設の寮生のみなさんが楽しみにしている〝しらはま喫茶〟が開店する。午前十時に開店し、コーヒー・紅茶・ココアをメニューに、来店するお客様へ提供している。このお店を切り盛りするスタッフはガールスカウト鳥取県第一団の子どもたち（小学校一年生～高校三年生）である。この愛らしいサービスを楽しみに来店されるお客様も多く、食券の販売や開店準備など子どもたちとお客様が一緒になってやっている、ふれあいの喫茶店である。この日は雨にもかかわらず、開店後まもなく二十人近いお客さんで店内はほぼ満席状態となった。

お客様の注文に追われ、大忙しの団員たち

大切なのは体で覚えること

この〝しらはま喫茶店〟をガールスカウト鳥取県第一団が主催するようになって今年で十年を迎える。団の発足は、昭和四十年で名前にある通り県内では最も早く組織された歴史ある団である。しかし、多いときは六十人いた団員も、少子化や子どもたちの多忙により、現在は十五人と減ってきた。活動の目的は、この喫茶店のように障害のある人たちとの交流をはじめ、地域奉仕活動、また自然との接触や国際交流など、国外を含めたさまざまな環境での実体験を通じ、自分らしく生きられる素地づくり、子どもたちの感性を大切にした人格形成を図ろうというものである。活動の内容もキャンプなどの野外活動に限らず、環境問題についての話し合いや生け花、レポート作成など多岐にわたっている。そして、それぞれの活動についての企画・運営は子どもたちの自主性を尊重している。すべてに通じて言えるのが体で覚えるということである。「入団当時、もじもじと、自分の言いたいことすら言えなかった子どもも活動を通じて、みるみるうちに目の前の課題を自分で解決する能力を身につけていく。その様子はまるで幼虫が蝶に姿を変えていくようである。」と発足当時からの団を知る小林康子（こばやしやすこ）リーダーは語る。

小林リーダー（左）と岩崎団員長（右）

目標はリーダー 背中を見て育つ子どもたち

団員である子どもたち以外にも、家族ぐるみで活動に参加するというのもガールスカウトの特徴といえる。巣立った団員たちが顔を出してくれたり、子どもが卒業後も親たちが活動を続ける。現在、団員長を務める岩崎清江（いわさききよえ）さんもガールスカウトに関わるきっかけは子どもさんの入団であった。そのお嬢さんも現在は独立し、母親としてまた社会人としてがんばっておられる。「娘の成長した姿を見るにつけ、ガールスカウトの活動方針は間違っていなかった」と岩崎さんは確信する。また、これといった目標を持たない風潮があるなか、「目標は私たちのリーダーです。」と言い切る後輩団員たち。そして、そのことばに自らを奮い立たせるリーダーたち。良い意味での緊張関係がお互いを結びつけている。人をかき分けていくようなたくましさではなく、いざというときに公平に交われる感性、社会での問題を解決する能力、手を挙げるものがいなければ「それじゃあ私がしましょうか。」と口にできる謙虚な勇気、こういったことをさらりと、自然に発揮できる人たちが鳥取に増えることを願って止まないと岩崎さんは語る。ガールスカウトのスローガンは、「女性の自立」、「良き公民の育成」ということらしい。男女共同参画はこんなところから始まる。

野外では、団員たち自ら役割を決めテキパキと調理していた